こんなところに

1、富士山のように
たくましく 働くよろこびをもち
健康な家庭をつくります

勤労者福祉共済会

◁昨年十月のバスハイク

富士市は工業都市ゆえに、多くの企業がありますが、勤労者のための福利厚生事業は、会社によってばらつきがあります。

そこで、市は昭和59年度から小規模な事業所を対象に、勤労者の福利向上と事業所の繁栄をねらいとした「勤労者福祉共済会」を始めました。

1人200円の入会金（事業主負担）と月々500円(事業主300円・従業員200円）の会費で、各種の慶弔金やレクリエーション、退職金共済掛金の補助などが受けられます。例えば、レクリエーションでは、プロ野球観戦やディズニーランドツアー、観劇会などが格安の料金で行われています。

この制度は、県内では富士市のみの制度で、現在484事業所、2,218人が加入しています。

ふるさとの昔話

前田新田の守り神 春日大明神

前田新田の松林に「春日大明神」と刻まれた石碑が、ひっそりと建っています。今回はこの碑にまつわるお話を前田新田の市川裕さん（七十八歳）に語っていただきました。

春日大明神

神様が夢枕に

今から七十年以上昔のお話です。前田新田に悪い病気にかかり、寝たきりになってしまった人がありました。いろいろな薬を飲んだり、お医者さんにかかったりしましたが、病気は一向によくなりませんでした。

ある晩のことです。病気で苦しんでいる人の夢枕に神様があらわれました。そして次の様に語りました。

「ワシは富士川で産まれた石の神じゃ。その昔、津波を防ぐ神としてこの地域に住んでおったが、今は流されてしまって潤井川の河口に横たわっておる。ワシを拾い上げ、春日大明神と刻めば、そなたの病はすぐに治るだろう」

たちどころに治る

翌朝、家の人が潤井川に行ってみると、長さ二メートル五十センチ余り、周囲は三メートル近くあろうと思われる大きな石が流れ着いていました。

早速、人を集め、大勢の人の手で石を拾い上げました。そして、現在の場所に祭ると、村人の病気はたちどころによくなりました。

当時は大騒ぎだった

市川さんは石を拾い上げた時のことも覚えています。「ありゃねえ私が五つか六つの時分だったね。五十人ぐらいの人が、舟を運ぶ時に使うころを敷いて運んだよ。当時は大騒ぎだったもんだ。春日大明神はそれから後に津波や富士川の洪水に遭ったけど、ビクともしなかったね。今は、地元の人でも春日大明神を知らない人が多くなって、寂しいね」と語ってくれました。

市川裕さん

地名の由来

藤間

藤間村は宝永七年（一七一〇年）から旗本戸田氏の知行地になりました。正徳三年（一七一三年）には津田村と水争いをしている記録があり、古くから開けた村であることがわかります。明治初年、蓼原村に吸収合併されました。

藤間という名の由来は明らかではありませんが、あるいは藤田氏が開発した後、藤田をはばかって藤間としたのかも知れません。

こちら編集室

広報ふじもおかげさまで五百号。関連取材で、幾人かの人に「どのページを読みますか」と尋ねました。答えで結構多かったのは、「あっ、そうそうこちら編集室も楽しみにしてますよ」という声。意外と多いファンに感激しました。なお、「まちかどネットワーク」は、五百号記事のため一回休ませていただきました。

発行・富士市役所　富士市永田町1丁目100番地　☎51－0123　人口 221,941人　男 110,124人　女 111,817人
編集・総務部広報広聴課　世帯数 64,165世帯　（3月1日現在）